

草庵仏教

第131号
(発行日)
2001年5月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (浜屋西宮店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

自他を救うもの

K 「私は歯が悪くて、お念仏を申そうと思ってもナムアマダブツと発音できないんですけど、どうしたらいいでしょうか」

D 「ナムアマダブツと発音できなくても、ナムンダーでもいいし、ナンダーでもいいし、ナーでもいいでしょう」

K 「ナーならできます」

D 「南無阿弥陀仏の名号をどう発音するかよりも、たとえばナーナーであっても、聞こえてくる響きにおいて仏のまことを聞くことが大切です」

K 「仏のまこととはどういうものでしょうか」

D 「阿弥陀仏の本願です。いわば(汝を助ける、引き受ける)と仰せられる大悲の誓願力です」

K 「大悲の仏心によって私たちが救われていくのですね」

D 「ええそうです」

K 「実際上の問題ですが、実は私の息子のことで困っているのです」

D 「どんなことですか」

K 「息子は会社勤めをしていますが、真面目に働いています。あることで会社の同僚から誤解され、それから人間関係が思わしくなくなりました。それで息子はクヨクヨと悩むようになり

落ち込んでしまいました。それで私がいろいろ元気づけたりアドバイスをしたりしますが、親の私の言うことに耳をかさず、私の言うことを聞いてくれません。困っています」

D 「息子さんが悩んでいるので、親のあなたがいろいろ助言をするけど、親のいうことを真剣に聞いてくれず、あいかわらず落ち込んでおられるのですね」

K 「ええそうです。そういう息子がかわいそうで、なんとかしてやりたいと思うのですが、どうにもなりません」

D 「息子さんが落ち込んで悩んでいるのを見るのはとっては辛いですね。父親のあなたが悩んでいる息子さんを何とか楽にするようにと、いろいろ手をさしのべるのだけれど、それでもどうにもならない。そういう状態なのです」

K 「ええそうです」

D 「息子さんが楽になるように願う、幸せになってほしいと思うのは子を持つ親の等しく願うところですよ。けれども、いろいろ子供に対して手助けはできても、なかなか親の願うとおりにはなりません。それで親としては悩まざるを得ないのですね」

K 「そうなんです。親の無力を感じます」

D 「人を助けると言いますが、本当は自分すら自分でどうすることもできない、そういうカベに私たち自身がすでに直面しているのではないのでしょうか」

K 「息子を心配している自分自身がすでに救われねばならない存在ではないかと言われるのです」

D 「阿弥陀仏のお心を聞かせていただく、我も人も、ともに阿弥陀仏に助けていただかなくては本当には生きられない存在だと教えられます。可愛い子にでも、多少の援助や世話はできても、私の力で本当に幸せにするには到底できるものではないように思います」

K 「そうです」

D 「一方、阿弥陀仏の方に目を転じますと、我も人も救いたもうのは阿弥陀仏のほかなしと知らされます。南無阿弥陀仏のお心を聞かせていただきますと阿弥陀様は、(お前や子供を助けるのは私の仕事であるぞ。お前は自分の責任と思つて思い悩まなくていい。そんなに苦しまなくていいんだよ。お前は自分の力で出来る世話をしておればよい。私がいるのだから、私にまかせてくれよ)と仰せ下さいませ。(我が名を称えよ)の弥陀の本願はかように私には響いてまいます」

K 「私は今まで、自分を幸せにするのは自分自身の努力によつ

てであり、私の力で息子の幸せをなんとかすることができると思っていたのです」

D 「ええ、しかし実際は、自分も他者も、自分ではどうすることも出来ないカベにぶつかってしまっているのです。それはすでに阿弥陀様がお見通しだったのです」

K 「私は自分を買いかぶつていたいように思います。それで随分、煩い悩んでいたのです」

D 「大経には阿弥陀仏は

一切の恐懼に、
ために大安を作さん
我まさに哀愍して、
一切を度脱せん。

と願い立たれた仏様であると説かれていきます。恐れおののいているすべてのものを哀れんで、平安を与えたいと願われ、

我、無量劫において、
大施主となりて
あまねくもろもろの貧苦を濟
わずは、誓う、正覚をならじ。

困窮している者に大いなる功德を施して、完全な救いを実現したいと願われたのが阿弥陀仏です。私たちは我も人も困窮し、恐れおののき、苦海にただよっている存在だと、阿弥陀様は見えておられます。そのような私たちを受けとって、平安を与えようと阿弥陀仏はされています」

K 「じゃあ私は何もしなくていいのですか」

D 「こうしなければならぬという一切の義務や責任から解除されて、あなたは自由であつていいのだとの仰せです」

K 「私から重荷を取り除いて下さり、私に代わって重荷をになつて下さるのですね」

D 「ええそうです」

ただこのように阿弥陀様が最終責任をになつて下さると聞かせていただくと、不思議というか自然というか、私として出来るだけのことをさせていただけう、子どもや周りの人のために手助けをしていこうという心が自然に湧いてまいります」

K 「そういうものですか」

D 「例えばごく卑近な例ですが、広い寺の境内の草むしりを（お前の責任で全部せよ）といわれたら、それだけでもうイヤになつてしまう。けれども母親が（庭の草むしりはお前の責任じゃあないお母さんの責任だからお前が背負い込まなくていいんだよ）と母親に言われたら、どうでしょうか。母のなさが身にこたえ、少しなりとも自分も草むしりをさせていたかどうかという気持ちが起こるのではないですか。草むしりは母の仕事だからオレは遊んでおつたらいいというのは、親心を感じていないからではないでしょうか」

K 「阿弥陀様が（息子のことは

心配である。お前の息子の幸せは全部弥陀の責任である。お前がどうにもならぬと自分の無力を嘆かなくともよい」と仰せられると、私としては本当に重荷をとつて下さつて有難いと感じざるを得ません。

では、息子のことはオレは知らぬとほつてしまうかというところ、自然に（親としてできるだけの助けはさせていただけう）となりますね」

D 「あるいはこういつてもいいのでしよう。仏が私を引き受けて下さることは、単に私を受けとるだけのことではなくて、私を真に生かそうとして下さることだと思ひます」

K 「仏の救いというのは私を受容して下さるだけでなくて、私を本当に生かそうとして下さるお慈悲なのです」

D 「ええそうです。私が仏の救いにあうことは、私が眠り続けることではなくて、そこから自発的に、自分に出来る勤めをさせていただけうという、そういう意欲が湧いてくるように思ひます。自分の力は非力であり、時には他者をもつと困らせかねない者であるにもかかわらず、他者の幸せのためにお役に立たせて下さるように、仏様は私をお導き下さるように思ひます」

K 「お役に立たせていただきましたという、それがすでに仏様のお導きであり計らいなのです」

D 「そしてそれは（私がやつている」と、自負されるべきものではなく、軽やかに喜んでさせていただく、そういう喜ばしい勤めです。

阿弥陀仏が（我が名を称えよ）と申されるのは、自他の救いを荷負したもう大悲のお言葉です。私たちは私の全分を弥陀になられた上で、ご恩報謝をさせていただくのです」

（了）

真宗聖典講座

『仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり』
(歎異鈔第9章より)

(現代語訳……阿弥陀仏は初めから知っておられて、あらゆる煩惱を身にそなえた凡夫であると仰せになつて居るので、から、本願はこのようになつたしどものため、大いなる慈悲の心でおこされたのだなあと思ふかされ、ますますたのもしく思われるのです)

〈歎異鈔第九章第五講〉

「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」というお言葉に、真宗の信心がどのようなものであるかが明瞭に表されています。

「阿弥陀仏のご本願はこのような私たちのためでございます」といわれる、このような私たちとは「煩惱具足の凡夫」です。

本願・念仏が「われらがため」とか「わたしのため」という表し方は、歎異鈔では他に4カ所もあります。

- 「罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまします」(第一章)
- 「願をおこしたまう本意、悪人成仏の

ためなれば」(第3章)

○「念仏はかいなきひとのためなり」(第1章)

○「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」(後序)

しかもこれらのお言葉は歎異鈔の中で非常に重要な箇所です。であれば、私たちが真宗の信心を理解し、身につけたいと願うなら、この箇所をじっくりといただかなくてはなりません。

弥陀の本願は「こんな私のためでありましたか」という驚きが信仰経験だといえましょう。何度も聞かせていただく弥陀の本願が、あたかも初めて聞くかのごとくに、私の全体の深部に突き通って下さいます。

さて、救われがたき私のための本願であり念仏なのですが、それを祖師方はいろいろなたとえで伝えて下さいます。そのたとえで一番よく使われているのが、船のたとえです。すなわち救いなき常没流転の我ら、常に沈んで浮かぶ瀬もなき我らを救うて下さる大悲の本願力は、あたかも船のようなものだとたとえられています。

○「難思の弘誓は難度海を度する大船」
(教行証文類)

○「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば」(教行証文類)

○「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞのせてかならずわたしける」(和讃)

○「小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもうまじ 如来の願船いまさずは 苦

海をいかでかわたるべき」(和讃)

○「弥陀観音大勢至 大願のふねに乗じてぞ 生死のうみにうかみつ 有情をよぼうてのせたまう」(和讃)

また本願を他の乗物にもたとえられています。聖人が敬慕されていた隆寛律師の著された『自力他力事』には

「たとえば、腰おれ足なえて、わが力にてたちあがるべき方もなし、ましてはるかならんところへゆく事は、かけてもおもいよらぬことなれども、たのみたる人のいとおしとおもいて、さりぬべき人あまた具して、力者に「興」をかかせて、むかえにきたりて、やわらかにかきのせて」

とのべられています。足腰が立たなくなつた人(我ら凡夫)が、自分の力でもとも遠いところへは行くことは出来なくなつていたところ、親切な力のある人たちが「興」という乗物を持って迎えに来て乗せて下さる。

こういう乗物にも弥陀の本願がたとえられています。

乗物のたとえのほかには、これも聖人が深く敬慕された聖覚法印の著された『唯信鈔』に綱のたとえが出てきます。

「たとえば人ありて、たかきしものしにもありて、のぼることあたわざらん、力つよき人きしのうえにありて、つなをおろして、このつなにとりつかせて、われきしのうえにひきのぼせんといわんとあります。谷底へ落ちて上へのぼるすべもなき力弱き人に、岸上から力の強い人が綱をおろして下さって、へさあ、この綱にすがれよ。引つ張り上げてあげるから」と呼んで下さる。ちょうど弥陀の

本願念仏は、阿弥陀仏が浄土に引き上げて下さる綱のようなものであるとのたとえです。本願念仏は「迷いの底に落ちている私のため」なのです。

また、聖人は弥陀の本願念仏を特效薬にもたとえられています。

「難化の三機・難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療しまう。たとえば醍醐の妙薬の一切の病を療するがごとし」(教行証文類信巻)
(救われがたい五逆・謗法・一闍提のもの、すなわち、治しがたい重病人のような私たちは、阿弥陀仏の大いなる慈悲の誓願にまかせ、他力回向の信心に帰すれば、如来は深くあわれみ、救って下さる。たとえば、醍醐の妙薬がすべての病を治すのと同じである)

ここでは弥陀の本願を妙薬に、私たち凡夫を病人にたとえておられ、弥陀の本願念仏はこのような重病人の私たちを治すために与えて下さる特效薬である、とのお心です。

このように船とか綱とか特效薬などは誰のためか。それは、そのようなものでなくては助かりようのない「煩惱具足のわれらがためなり」と受けとっている、それが信心の姿である。

本願も念仏も浄土も阿弥陀仏も聖教も、すべて、(かくのごときの私のため)の大悲のお働きでありました。ナムアミダブツと私の口にまで称え上がって下さる一声のお念仏がまことに「こんなお粗末な救われがたい私のため」でした。

(了)

信仰夜話

○蓮如上人曰く「仏法には、明日と申す事、あるまじく候う」と。

また、禿頭誠師の歌に

「わがいのち 今か今かとおもうべし 明日とおもえば 弥陀にうときぞ」と。

先徳は、明日の日があると思っ
てはいけない。明日の日はない、今日ばかりのいのちと思つて聴聞せよ、と仰せられる。

そうはいわれても、なかなかそうとは思えないのが私。なにやらまだまだ生きておられるような思いがあるのも事実。しかし、心の中にそういう思いはあつても先徳の仰せがまことであると、そういただくことが大事。

なぜ、明日と思つてはいけないのか。そういう思いでは、仏法をへんこそのままなりのお助けと受けとる機縁を逃がすからである。また、それほど阿弥陀仏は急いでおられる。

臨終一念に迫つたもの、極く短命のものも救われてこそ万人が救われる。今死ぬる人も捨てないのが本願の広大さ。仏法にであつても、手間ひまかかり、長い期間を必要とする救いなら、臨終迫つて初めて仏法にであつた人は救われない。万人を救う本願は今死ぬる人すら救う本願でこそ、平等の大悲。

弥陀の本願は「わが国に生まれるとお

もえ」との仰せ。この言葉が身にしみて有難いのは、何と言つてもこの世のいのちの終わりが目前に迫つた人。まだまだこの世に生きておられるつもりだから、「我が国に生まれさせよう」の大悲が通りにくい。今日ばかりのわがいのちと思えば、この本願の言葉がまことに身にしみみる。最近死後の浄土はあまり言わなくなつたが、それだけ私たちに「いのちの危機感」が乏しくなつた証拠ともいえる。しかし、人間のいのちは呼吸の間にしかない。明日のいのちが保証できぬ我が身である。

「仏法においては明日ということがあつてはならない」と仰せられるもう一つの意味は、まだ先があるという気持ちになると、「まだ私は私を何とか出来る。まだ今後私をよりよく変えることも可能だ」という自力のはからいが生ずる。「もう何年かよく仏法を聞けば分かるようになるだろう」とか「もうしばらく聴聞すれば有難い信者になるだろう」と、へんこかなれる」という自力憍慢が頭を持ちあげる。そうすると、阿弥陀仏の「そのままなりで助ける」という大悲が通らない。

ところがもはや今晚のいのちしかないとなると、へんこの私をどうすることもできぬ、どうかなること出来ぬ、このまま死んでいくしかなく、絶体絶命となる。さあそんな私に本願はどう仰せられるか……。

要するに、まだまだ長い人生と思ひ、まだこれからしばらくは生きられるという長綱張つたような気持ちでの聴聞は「弥陀にうときぞ」とのお叱り。そのお

叱りこそ、これを書いてある私えの厳しいお叱り。

○得易くして得難きは、他力の大信。まもり難くして、まもり易きは、信の上の努めとある。努めとは、念仏の邪魔をせぬこと、日々の日暮しのこと。

このお言葉は『松並松五郎』さんの法語の一節である。他力の信心は得やすいようで難しいとのこと、これはまさに実感。それは、私の努力のあり方や私の能力の上での「易しい・難しいの難易」ではない。

他力信心は私の側から全く手の及ぶものではない、そういう難しさである。仏様の大悲より与えてくださる信心で、他力よりたまわる信心と聞くと、まことに易しいようだが、裏から言うとならぬので信心を取りに行くことの出来ないのが他力の信心。だから極難信。

ある妙好人が「阿弥陀さんは袖引きにかかると逃げなされる」といわれている。こちらから阿弥陀様をつかみに行くとならぬ阿弥陀様は逃げてしまわれる。なぜなら私が仏をつかむと私は必ず仏を利用して、私の功利心を満たす手段にしてしまい、一層深く私が迷うてしまう。だから、仏は私の計らいにつかまれたまわらない。

私が仏をつかむのではない、私が仏につかまれるのが信経験。仏を私がつかまえて下さる信心（仏語）をみずから払いかけているのである。

さて、ここで松並さんが、「努めとは、念仏の邪魔をせぬこと」といわれている。これは何を意味しているのだろうか。

一般に「念仏とは、私が仏を念じること」といわれる。

松並さんはそこをもう一つ徹底して「仏が私を念じたもうこと」と仰せられる。阿弥陀仏は私を念じづめであり、喚びづめであると申される。弥陀は私を久遠の昔から念じづめ、喚びづめ。その「念仏を聞く」ことが日々の具体的な念仏であり、私の第一の努めであるといわれる、それが松並さんのお心だと思ふ。

私が念仏を申すことの本義は、阿弥陀仏の喚び声を聞くことであり、それは同時に、我を常に念じたもう仏心大悲にふれることなのである。

禿頭誠師の語録『求法用心集』に、香樹院徳龍師の言葉として「喚びづめのお声を聞きづめにすべし。きつと聞き付けさせて下さるること」と仰せられている。

私を念じ私を喚びづめにしたもう、そのお声（弥陀の声）を聞くのが、自分における日々のお念仏。念仏を聞きづめにするのが、日々の努めである。

しかるに、我ら凡夫は、世間のことに気が紛れ回つて、ろくろく念仏を聞こうとしない。そのことを「念仏の邪魔をする」といわれたのであろう。弥陀が常恒に喚びたもうにもかかわらず、その念仏を聞こうともしないで、どうでもいいことに心が奪われている。そのことが「念仏の邪魔」をしているのである。